

平成 29 年度地域循環共生圏構築検討業務  
小田原市 小田原森里川海インキュベーション事業“寄気”中間報告会（兼意見交換会）  
議事概要

【開催日時】平成 29 年 12 月 5 日（火）9：15～14：00

【開催場所】小田原市役所 7 階 大会議室

【出席者】別紙

【事業参加大学】

順番	大学名	学部等	指導教員	研究テーマ
1	文教大学	国際学部 国際観光学科	かいづ 海津 ゆりえ	おだわら森里川海エコツーリズム展開に向けた可能性調査
2	東京都市大学	環境学部 環境創生学科	よしざき しんじ 吉崎 真司	放棄竹林を利用した竹林ランド（バンブーパーク）の形成
3	慶應義塾大学	環境情報学部	いちのせ ともひろ 一ノ瀬 友博	石橋・米神地区の樹園地における耕作放棄地の立地特性と獣害発生地分析に基づく地域ぐるみの獣害対策-ワナオーナー制度の提案
4	星槎大学	共生科学部大学院 教育学研究科	まとう しゅういち 鬼頭 秀一	小田原地域における「共感と信頼にもとづく経済圏」のコアとなる「おだわら森里川海ブランド」構築の枠組みづくりに関する研究
5	東京農工大学	生物システム 応用科学府	なかやま まさゆき 中山 政行	地域の自立に資する FEC+M 自給圏の創出に関する研究と実践
(欠席)	東京工業大学	生命理工学院	たちばな かずのり 立花 和則	小田原市の山・里・川と「海」を結びつけるための海洋リテラシー向上

## 1.中間報告

(1) 文教大学

【発表者】

文教大学国際学部国際観光学科 3 年海津ゼミナール 小倉琴美、小島陽香、宮島朋花、渡辺美緒

【発表概要】

○研究の目標

- ・ 小田原市における森里川海+町資源（宝）を活用したエコツーリズムの展開に向けた調査と可能性の検討を行う。

○調査実施状況

- ・ ヒアリング調査（人的資源）、現地調査、資料（パンフレット）収集を実施。

○成果

- ・ エコツアーのテーマは「循環と共感」。観光客がエコツアーに参加、小田原の循環を楽しみながら学んで共感してもらうものにする。「さとやま女子」などのキャッチフレーズを使いながら、若者に新しいライフスタイルを提案する。

○課題

- ・ 小田原駅周辺しか調査していないため、駅から遠い場所の現地調査が不足している。
- ・ 景色の良い場所へのアクセスが悪い。交通手段を検討する必要がある。

## ○今後の計画

- ・ フェノロジーワークショップ、カレンダーの制作（H29）
- ・ モニターエコツアーの企画、評価、エコツーリズム展開への提案（H30）
- ・ 観光客ニーズ調査

## 【質疑応答】

- ・ 涌井委員：一般観光とエコツアーの定義の違いは何か。エコツアーのコンセプトは？資源の把握についても、その定義がないと観光資源調査になってしまうのではないか。小田原の森川里海の循環がどのように可視化できるのかということまで検討してもらえると非常にうれしい。
- ・ 文教大学：定義としては、一般観光は施設がありそこに観光者が訪れてお金を落とすこと、エコツアーは学びをもって地域の人や自然を訪ね、そこにお金を落として地域を活性化させるという風に定義している。資源については今ある小田原の資源についてピックアップしているので、これからエコツアーにつなげていきたい。
- ・ 鳥居審議官：日本中には色々なエコツアーがある。文教大学の研究では、小田原らしさ、森里川海を中心としたエコツアーを目指してほしい。また、もう少し前面に出してほしいのは、小田原が森里川海プロジェクトなどを通じて何を目標しているのか。これを出せば、今後の展開もフォローしていきたいと思うリピーターが増えるのではないか。ストーリーを発信していくことを考えて欲しい。
- ・ 古川理事：地元の間人は固定観念がある。地元のことを勉強して、年寄や地元の意見により過ぎないような、斬新な皆さんが楽しめるツアーにしてほしい。
- ・ 八木アドバイザー：ツアーの具体的なターゲット（人物像）を置いているか教えてほしい
- ・ 文教大学：自分たちと同じくらいの年代の女性で、自然にあまり触れていない若者をターゲットに、「さとやま女子」とキャッチコピーをつけて興味を持ってもらおうと考えている。
- ・ 八木アドバイザー：ターゲットにしたような若者が来たとき、地域に住んでいる人へのメリットはどんなものと考えているのか。
- ・ 文教大学：来た人にお金を落としてもらって地域に循環に回してもらうこと、地域の良いものを知ってもらい、SNSで拡散してもらえることをメリットと考えている。
- ・ 八木アドバイザー：質問の意図は、外から入ってきた人が増えると、ファンも増える。環境を保全するには外からのお金を入れることが必要。イベントをきっかけにエコツアーでより深く小田原を知ってもらい、好意的な“よそもの”を増やしていくのが支援を増やすことに重要である。外の共感者を増やしてお金を循環させる仕組みづくりの起点の一つにエコツアーをしてほしい。自分の知っている地域では、地域の人が着地的観光を企画して、クラウドファンディングで実施のための資金を調達するというをしている。外の人が共感して支援するとその企画が根付くということがある。きちんと支援者をイメージできている地域のプレイヤーのチャレンジにはお金が集まっていた。
- ・ 渡邊アドバイザー：「循環と共感」をどう深掘りしていくのが気になった。また資源をもうすこし深掘りしていったほうがいい。文化、人、食品色々あると思うが、全部だと総花的になってしまう。生協も交流事業をしているが、人を集めるのが大変である。地元との定期的な交流を視点に入れたらどうか。時期とテーマをずらして開催するなど、最初のきっかけからどう巻き込んでいくか考えると面白い。
- ・ 文教大学：深掘りという意味では、面白い人が小田原にたくさんいるそうなので、人的資源のほうを

深掘りするのが良いと思った。また自分たちも自然の循環については勉強不足なので、勉強していきたい。交流も視点にいれたい。人とのつながりは再来訪に重要なので、「あの人にまた会いたい」という動機をつくるエコツアーを作っていきたい。

- ・ 石井アドバイザー：小田原に来ている若者は何を見に来ているのか、自然を知っているのかどうかという分析が欲しいと思った。また、交通が不便なのでどうやって周辺の自然を繋げていくのかということモデルツアーでやっていただけるといい。もう一点、お金を落としてもらうことも重要だが、受け手のメリットがもうちょっとわかりやすすくないと、継続的に進めるうえでどこかに負担がきてしまうと思う。その視点も入れて置いてほしい。
- ・ 文教大学：旅行者の分析については、ヒアリングをした中では、シニア層、ファミリー層が多く、皆小田原城に行っているということで、若者の話はなかった。分析は必要だと思う。アクセスについては、自分たちは小田原城と何かを足してエコツアーにしたいと考えているので、バスなどの利用を考えていきたい。
- ・ 樋口アドバイザー：エコツアーの定義がよくわからなかった。また、継続してツアーを実施するということになると、旅行業の資格を持っている人がコーディネーターをやることになる。コーディネーターをだれがやるのかということと、コーディネーターが儲かるような仕組みを研究の視点に入れて欲しい。またツアーのニーズが気になった。モニターツアーを企画して、色々声をかけていくやり方をとるのかと思うが、ツアー内容の検討と同時進行で、皆さんの大学の中でターゲットと想定する人に募集をかけてみることを考えてほしい。また、訪れる場所を組み合わせることを想定しているが、自然の中で遊ぶのと町中で遊ぶのは服装も異なると思うので、そういう視点を忘れないようにしてほしい。
- ・ 文教大学：モニターツアーの募集を大学でやってみることを考える。これからは先を見据えた調査をしていきたい。
- ・ 涌井委員：大事なのは、小田原について皆さんは本当にどう思っているか。住んでみたいと思うのか。率直に自分がどう思うかという意見をもって、小田原を見てほしい。
- ・ 鈴木副会長：皆さんに実際に既存の観光地やカフェでない小田原の地域を歩いてみて欲しい。既存の観光地を見ていると同じような内容になってしまう。一日だと1エリアくらいしか歩けないとおもうが、すごい景色があるところがあるので、森里川海がいつぺんに見えるような小田原ならではのところを見てほしい。

## (2) 東京都市大学

### 【発表者】

(代理) 東京都市大学大学院環境情報学研究科吉崎研究室博士後期課程 伊東日向

### 【発表概要】

#### ○研究の目標

- ・ 放棄された竹林を利用して、徹底的に「竹」にこだわった公園（(仮称)竹林ランドまたはバンブーパーク）をつくり、市民の憩いの場として整備する。竹林を利用することでコントロールする。

#### ○調査実施状況

- ・ 小田原市に生育するタケ類、ササ類の文献調査。

- ・ Google アース、現地踏査による小田原市全域における竹林分布図の作成。
- ・ パークのモデル設定、モデル竹林の選定条件の設定、配置方法の検討。

#### ○成果

- ・ 小田原市で確認された種類はタケ類 2 属 4 種、ササ類 4 属 7 種。
- ・ 竹林分布図の作成により、竹林は民有林に多く、傾斜地にも多く分布することが確認。
- ・ パークモデル 5 つ (①食べる竹林 (たけのこ)、②遊ぶ竹林、③体験する竹林 (竹細工等)、④なりわいの竹林 (きのこ生産)、5 生産の竹林 (竹材、竹炭)) の提案。

#### ○課題

- ・ 進捗状況が計画の 20%。
- ・ 伐採竹の利活用についての技術的な課題の把握、解決。
- ・ モデル竹林の選定。

#### ○今後の計画

- ・ ワークショップの開催。
- ・ 竹チップや竹パウダーの生産やキノコ作り、竹細工や物差しづくりを実施する上での技術的な課題について地域の業者さんとの話し合い。
- ・ 竹林所有者のヒアリング、候補地の抽出 等。

#### 【質疑応答】

- ・ 涌井委員：発表で森林の崩壊が竹林を増やしているという指摘があったが、小田原ではミカン畑の耕作放棄が竹林化しているのではないかと。そこをもう一度考えてほしい。また急傾斜のミカン畑は耕作放棄されやすいが、急傾斜地に竹が侵入した場合は土砂崩壊を防いでいる側面があるので、その評価をどうするのかという問題がある。また、箱根山系での問題点は畑作を放棄するとアズマネザサが侵入してくるということがある。人の背丈くらいになる。縮退していく農地に竹林、笹がどのように侵食していくのかを明らかにすると、小田原らしい森里川海の自然が破綻する要因を明らかにできるのではないと思う。私は「森は海の恋人、川は仲人」といっている。川が仲人というのはとても重要で、斜面をどうするのかという問題がある。そこを見てほしい。また「バンブーランド」という呼称だが、バンブーは竹とは違い、株のところからたちあがっていく種類である。植物学的な視点でここを指摘する人は多いと思うので気になる。
- ・ 鳥居審議官：この研究の課題は、小田原の竹林問題をどう実証事業の現場に当てはめて、どう経済的に持続可能な仕組みを構築していくかということである。竹チップ、竹パウダーの売り場、流通経路などの具体的な悩みについて、地域内外の色々な関係者と相談して議論してほしい。
- ・ 東京都市大学：関係者の意見を聞くのは、研究と同時並行で進めていきたい。
- ・ 川島理事：求めていたものが結構あった。素晴らしい発表で有難い。発表のパワーポイントにあった、ハコネダケの一斉開花の状況の出典を教えて欲しい。また分布図で中標高、里山地域を中心に分布しているという部分があった。箱根山系はハコネザサとスズタケが蔓延している地域があり、神奈川県の本数調整で木を伐採したところで増えているものがある。そこは森林と里山地域の分布境界があいまい。そのあたりをもう一步考えて頂ければと思う。里山地域の竹林の拡大というのはこれでいいとは思っている。また林産物の価値の向上は大事だが、これだけでは放置竹林の解決にいたら

ないと思う。山口県では竹質バイオマスの炉が開発されたと聞いた。このあたりの活用について小田原市、県、環境省さんとぜひ検討していただきたい。

- ・ 小田原市：放置竹林は課題であると認識している。バンブーパークは誰をターゲットにしているのかということが気になった。バンブーパークだけでは人が呼べないのではないか。曾我、橘地域には玉ねぎ栽培の市民農園である程度人が来訪するところがあるので、そういったところや、エコツアーなどと連携し、小田原ならではの取り組みをしていきたい。
- ・ 辻村会長：山林経営をしている観点からいうと、タケノコは梅や木材、かんきつ類より単価が高く、良い収入になるので良いと思う。またミカン畑からの竹の侵入という話があったが、これに加えいわゆる戦後の農地解放で畑になったところが放棄されてそこが竹林になっていると思う。この問題は森林簿からは出てこない。また、本研究では竹の繁茂を抑える方策も検討してほしい。
- ・ 近藤副会長：学術的な意味は別として、竹林と竹藪を分けて考えたほうが良いのではないかと。竹林は手を入れた林で、京都のほうにあるイメージ。間伐されて傘をさしても入れる場所。竹藪は手入れされていない場所。竹藪を竹林にしてももらえればいい。竹藪になっている地主さんに話して、手入れをする代わりにタケノコを掘るといというような仕組みも考え、実行できるような方法を考察してもらえるとよい。
- ・ 樋口アドバイザー：ボランティアだけでは手が回らなくなるので、活用の方法をもう少し深掘りして行ってほしい。地元で竹に付加価値をつけて販売していくという事例がない。竹製品にするのか、竹質バイオマスにするのか、継続的に切り出して提供してもらうことがどれくらいで採算ベースに乗れるのか、考えて行ってほしい。
- ・ 石井理事：民有地の竹林をどうしていくのか、持ち主の方と竹林ランドとどうやってつなげていくのかという方法が重要かと思った。また竹を使った生活を小田原市民に提案してほしい。
- ・ 伊豆川理事：発表内容についてだが、バンブーパークの配置に追加してほしい視点がある。パーク以外で伐採した竹林を処理する方策が必要。配置案のパーク3, 4, 5については、他の地域で伐採した竹を加工に使う場合も想定し、竹の選別について効率的な方法も考えて欲しい。
- ・ 涌井委員：竹林に覆われているのをどう再生するのかというテーマは大変大事だと思うので、今後に期待したい。

### (3) 慶應義塾大学

#### 【発表者】

慶應義塾大学総合政策学部4年 阿久澤萌

#### 【発表概要】

##### ○研究の目的

- ・ 石橋地区をモデル地域とした地域ぐるみの獣害対策としてわなオーナー制度の提案・実施。

##### ○調査実施状況

- ・ 石橋地区での獣害調査のヒアリング。
- ・ ヒアリングをもとに自動撮影カメラを設置、イノシシ生態調査の実施。
- ・ 石橋地区のドローン撮影による土地利用図の作成。

##### ○成果

- ・ 石橋地区における獣害マップの作成、対策エリア選定。
- ・ わなオーナー制度、樹園地の生物多様性を生かした取り組み（企業の CSR,NPO、一般市民の利用）の提案。

#### ○課題

- ・ 土地利用調査で耕作放棄地を判別しきれていない。
- ・ イノシシの生息数、樹園地までの移動経路が不明。
- ・ イノシシを捕獲する罠についての課題。罠の見回り人員の確保、箱罠の確保、くくり罠を利用する場合の危険性の問題がある。

#### ○今後の計画

- ・ 箱罠の設置実験、イノシシの捕獲。
- ・ クラウドファンディングを利用した実証実験、ワナオーナー制度の事業計画書作成。
- ・ 獣害調査（イノシシ移動経路の把握、個体数の推定）、より正確な土地利用調査の実施。
- ・ わなオーナー制度の設計（猟場の選定、企業との連携、猟師の確保）。

#### 【質疑応答】

- ・ 涌井委員：獣害対策の中で、なぜイノシシを対象にしたのかというプロセスがもう少し明確だとよい。他の獣害についても調べたのか。
- ・ 慶應大学：一番被害がひどいのはサルとイノシシということだった。サルについては、南側を移動していることと、県で保護動物に指定されていること、猟友会が定期的に追い払いしているということがあったため、対象にしなかった。他の獣については被害が確認できなかった。
- ・ 涌井委員：耕作放棄地の凶化を試みているが、ぜひ進めてほしい。また、ヤマビルが神奈川県下ではイノシシにつきはじめたという情報があるので、捕獲した際にはヒルが吸血しているのか調べて欲しい。
- ・ 鳥居審議官：持続可能な形で進めるためには、止め刺しや見回りなどにおける猟師さんの協力なしでは難しい。猟師さんの人件費なども必要であり、どうやって収入をあげていくのかということにかかっている。また、エコツーリズムの話にも関連してくるため、他大学と横の連携も図ってほしい。
- ・ 川島理事：捕獲方法についてだが、箱罠は機動力がない。見回りが猟師さんなら、猟期を外せばくくり罠でもいいのではないか。
- ・ 慶應大学：くくり罠は事故が多いということ、猟犬などがかかった場合損害賠償があるなど、地元の方がくくり罠については乗り気ではなかった。箱罠なら地元の方が散歩がてら見に行けるということだった。
- ・ 川島理事：罠をかけられる人が少ないので、くくり罠名人の養成などを小田原市や環境省でしてほしい。罠の免許をこの間とったのだが、猟期は蓋をして猟犬が踏まないようにするという方法があると聞いた。また耕作放棄地の草刈りについてはとてもいいことだと思う。
- ・ 辻村副会長：次年度以降は、これにかかるコストを知りたい。罠に加速度センサーをつけて、獲物がかかったらわかるというシステムが開発されたと聞くので、その全体のコストを知りたい。
- ・ 鈴木副会長：根本的などころで、罠オーナー制度に固執しなくてもいいのではないか。地元の人たちは撮っていただいた動画でイノシシの生態を初めてみたという人もいた。皆好意的にこの調査を見

ているので、協力を得やすいと思う。現実味を帯びた方法にいてもいい。

- ・ 石井理事：鈴木さんと同じ質問で、罾オーナーとは他の方法を検討したらどうか。地元で罾をしている人から箱罾はかなり難しいと聞いた。もう一つ質問だが、この地域で罾をかけた人はいたのか。
- ・ 慶應大学：小動物用の罾が放置されているのを現地でみたが、石橋地区では今は罾をしている人はいないということである。
- ・ 石井理事：対処療法だけでなく、根本的な対策も考えて頂けるとありがたい。
- ・ 小田原市：今後の展開、テーマの変更については、個人的には目的が同じであれば、相談させてもらえばよいと思う。また、これは八木アドバイザーに対する質問だが、クラウドファンディングは共感を得るためのきっかけ的なものが必要だと思う。どういう方法が一番お金を集まりやすいのか。特に幅広い人を対象にした場合を知りたい。
- ・ 八木アドバイザー：事業内容としては、すぐにクラウドファンディングにチャレンジできる内容だと思う。インセンティブを考えるポイントだが、お返しの商品が一番のリターンではない。お金を出してくれる人は一般の個人の方。まず、「私とその未来に住みたい」と思ってもらうことが一番のインセンティブである。目的・目標があってそれにむかう手段が罾オーナー制度であれば、未来に共感してくれる人からすれば、実行してくれることがインセンティブになる。返礼品があるとよりコアなファンになるということはある。目的とストーリー、どんな未来が待っているかをしっかり伝えることができれば、共感、支援はついてくる。また、支援してくれる人のペルソナ、イメージを考えてもらうことも大切。プロジェクトのメンバーだけで意見を交換することは限界があるので、色々な場所で「どんなリターンがあればうれしいか」と意見を聞いてみてもいいと思う。
- ・ 渡邊アドバイザー：うまくいくためには、モノだけではなく目的をしっかりと示すこと、現実の課題をどうやって解決していくかを共有していくのが大事。もう一つは神奈川県という地域の中での愛着、小田原への愛着につなげていくのが大事なのではないかと思う。自分が組合に聞いてみてもいい。全国どこの生産地も、鳥獣害、担い手不足、耕作放棄など同じ問題がある。これは消費者と共有していかなければいけない話である。
- ・ 川島理事：アラート付きくくり罾については、とれたことがわかると猟師さんがいくことになるので、罾をかけるリスクが低くなる。小田原市とタイアップする、試行的に貸してもらうという方法もあるので、活用を考えて欲しい。
- ・ 伊豆川理事：罾に無人カメラをセットして、携帯に画像を送るシステムだと5万円くらいで買える。
- ・ 慶應大学：罾リモコンを開発している人に話を聞きに行ったが、石橋ではくくり罾を置く場所が山奥になるので、電波が届かないということだった。
- ・ 伊豆川理事：石橋なら全部は無理でも届くのではないか。
- ・ 石井アドバイザー：一頭捕獲するコストとリターン、安全性のバランスだと思う。関係者の方と議論を進めていただきたい。
- ・ 樋口アドバイザー：企業のCSRがキーワードに入っていたが、鳥獣被害額の算定ができているのが気になった。またイノシシを減らすなど目標設定についても、企業にアプローチしていくなら必要である。農家さんが困っているという理由では企業は動かないので、小田原の環境を守るためという視点の切り口が必要。企業に出資を求めるならば、数字の部分がちょっと足りない。その辺りを煮詰めていただきたい。

- ・ 八木アドバイザー：クラウドファンディングで大事なものは、顔が見えること。実行する本人がわくわくしているかが大事。また、障壁の多い見回りについては、イノシシが罠にかかっていたら3ポイントのようなゲーム要素を入れるなど、アイデアで課題解決をするような工夫を期待したい。慶應大学：来年度に向けてコストの算定をして事業計画書を作成したい。
- ・ 涌井委員：非常に興味ある良い研究をしている。これからちょっと分かれ道になるかと思うのは、イノシシの生態調査として進めるのか、罠などのシステムを構築する計画論になるのか。イノシシの現存量を推定して、どれくらい捕ったら被害がなくなるかまで踏み込んだ上で、どういうシステム構築にするか考えるのが大事。現存量を推定すれば地元の人と共通の目標を設定できて、信頼感を得られる。地元がかなり協力してくれるようなので、石橋地区をモデルとしてやってほしい。

#### (4) 星槎大学

##### 【発表者】

星槎大学副学長・共生科学部教授 鬼頭秀一

星槎大学共生科学部教授 保屋野初子

##### 【発表概要】

##### ○研究の目標

- ・ 「共感と信頼にもとづく経済圏」を作り出すため、「おだわら森里川海ブランドの構築のための枠組み作り」を立ち上げる。
- ・ おだわら環境志民ネットワーク内に「ブランド認証委員会」を設置、専門家・行政とともに認証システムを構築する。ブランドの認証及び頒布を「駆け出し認証プロジェクト」として実施（農工大チームとも連携）。

##### ○調査実施状況・成果

- ・ 星槎大学教育免許状更新講習で、教員と環境志民ネットワーク森里川海の活動を結び付ける試みの実施。
- ・ 地域ブランドに関する情報収集。
- ・ 駆け出し認証プロジェクトの対象として「おひるねみかん酒スパークリング」「冬みず田んぼカモ米」を検討。

##### ○課題

- ・ 認証委員会がまだ立ち上がっていないなど、具体的な事業の進め方。
- ・ ブランド価値の創出、共感を得るためのプロセスの設定。

##### ○今後の計画

- ・ 「駆け出し認証プロジェクト」の具体化、実施、モニタリングの実施。

##### 【質疑応答】

- ・ 涌井委員：フィールドのデータが欲しい。コンセプトは良いが、現実はどう投影していくのかという部分をもっと進めて欲しい。これは議論なのだが、先生は市場経済と非市場経済に分けていた。環境学者は環境容量が定まっていて、ティッピングポイントを超えそうだという危機感を持っている。自



然は資本財であると考え、市場経済と非市場経済は分けられず、循環する生態系サービスが市場をつくる、循環していないものが非市場経済となると考えているのだが、これは間違いだろうか。

- ・ 星槎大学：間違いではないと思う。どういうところに焦点をあわせるかというときに、ローカルな自然資源、生活、産業的なものがあり、その中で市場・非市場経済が連関した形で家業があったと思うので、あえてそういう風書いている。
- ・ 涌井委員：報徳思想はCSR（Corporate Social Responsibility）の発想だと思う。今はCSV（共有価値：Creating Shared Value）の考え方。それそのものが生存の基盤にたつものだと考えている。また、実証のフィールドを定めてエビデンスをいただきたい。
- ・ 星槎大学（鬼頭）：おひるねミカンスパークリングと、環境志民ネットワークでの認証ワーキングを進めていきたい。
- ・ 鳥居審議官：他の実証地域では、徳島吉野川流域でコウノトリレンコンをブランド化したり、鹿島市ではラムサール干潟で採れた海産物をブランド化していきたいという動きがあるなど、シンボルを定めてブランド化に取り組んでいる。小田原で共感を生むことも大事だが、わかりやすいロゴなりラベルなりを作っていくことも重要だと思う。ぜひブランド化を進めて地域にたくさんのお金が落ちるようにしてほしい。
- ・ 星槎大学（鬼頭）：小田原は全国的なとおりが良いものはないが、個別に地域の課題をしっかりとやっているところがある。小田原の場合は人のつながりで地域の課題を解決していくところをうまく見せたいと考えている。
- ・ 星槎大学（保屋野）：地域ブランドはほとんどが地域の外にアピールするものである。わかりやすいアイコンを立て、外の人に買ってもらい、中にお金を還流するという仕組みである。小田原は、中で消費力もあるし、また教員免許更新の時に地域の人小田原市内のことを知らないという感想が最も多くあった。小田原の地域ブランドは、小田原の地域の恵みを知るといった目的で使っていきたいと考えている。
- ・ 伊豆川理事：本大学の担当理事でブランド構築の検討を一緒にやっている。生産者ではなく、第三者が認証して、消費する地域の人納得して買う魅力的なもの、また地域の課題を解決するものを認証しないとイケない。フィールドに落とし込むところで課題がたくさんある。色々な人の意見を聞きたい。
- ・ 辻村会長：小田原は自分たちがまとまるブランドがないということが歯がゆい。自分たちがまとまるブランドにして、それを外部の人に見せるような活動にしてもらえればよい。そこにヒントを与えるような活動にしてほしい。
- ・ 石井理事：ブランディングで景観の価値を位置付けてほしい。また、地元に向けてということに共感した。関連して、地域通貨を使って回していくということができないかと思った。
- ・ 星槎大学（保谷野）：景観は良いと思う。一緒に認定していく人とプロセスに価値があると思う。
- ・ 星槎大学（鬼頭）：地域通貨も一つのやり方だと思うのだが、ブランディングとどう関係づけるかということを考えたい。今回はおひるねみかんを例として出したが、どういうものを認証するのかというのは、商品に思いがないとうまくいかない。我々だけでなく市民ネットワークや生産者の人と討論して進めていきたい。認証委員会は小田原市のほうに調整して立ち上げてもらいたい。そこで色々な人と話していきたい。

- ・ 小田原市：ブランド化について何が必要なのかということで、市民は何を誇りに持てば良いということが明確になっていない。スタート地点として、市民にどう広げていくのかというのは協力できるところはしていきたい。共感を広げる中での第一歩ということでは同じ認識である。
- ・ 八木アドバイザー：「かけだし認証プロジェクト」の具体化の部分は、クラウドファンディングのスキームとして協力させていただければと思う。クラウドファンディングを応援してくれる人はアーリーアダプターである。そこからマジョリティにたどり着くのはご自分たちの力が必要だと思うが、まず共感の度合いの高い人から応援してもらおうという意味合いでは、地域を一つにまとめるきっかけになるところをお手伝いできればと思う。地域通貨の話があったので情報提供だが、岐阜では飛騨信用組合が「さるぼぼコイン」という電子地域通貨をリリースしている。（通貨を使える）加盟店が100店くらいある。電子通貨だとハードルが低くなるので、かけだし認証を実施した上で、後押しする意味で参考になる。またコミュニティ財団のようなものも参考になるかと思う。
- ・ 石井アドバイザー：地域内に発信するということがあったが、そもそも、地域の人が価値を感じていないように思う。感じていないからのこの現状だと思う。価値を感じてもらうためにはどうしたらいいのかという部分をもっと詰めたほうが良いのではないかと。学校の先生に地元のことを知ってもらうという取り組みはとても良い。地域のことを深く知ってもらう取り組みを進めたほうが良いのでは。いきなり認証制度から入るのは難しいのではないかと。
- ・ 涌井委員：先生方にリードしてもらえれば面白いことになると思う。共通するのは「小田原でしかできない」ということだと思う。「いまして、ここでしか、これしか」ということが大事。小田原の固有名詞をほかのものと置き換えて通用するような話ではいけないと思う。そういったところを詰めていただきたい。

## (5) 東京農工大学

### 【発表者】

東京農工大学大学院生物システム応用科学府 特任助教 中山政行

### 【発表概要】

#### ○研究の目標

- ・ FEC（食・エネルギー・ケア）+M（お金）自給圏を小田原で創出すること。

#### ○調査実施状況・成果

- ・ 小田原の現場でのフィールドワーク（地元親子、相模女子大、農工大学生等での田植の実施）と商品開発会議（おひるねスパークリング酒パッケージデザイン）の実施。
- ・ 国際文化交流プログラム（ドイツシュタインバイス大学日本研修の受け入れ）の実施。地域資源を生かしたインバウンドツアーを8つのプログラムとして企画、日本側36名、ドイツ側60名が参加。

#### ○課題

- ・ 農地を維持するための、作業人員が不足。地元人材バンクのような仕組みの検討が必要。
- ・ 国際交流プログラムの地域の受け入れ側はボランティアであり、活動を継続していくためにはインセンティブの設定が必要。個人の利得と地域全体の利得の両社を得られる仕組みの検討。
- ・ 自立のための経済的な仕組み作りについて、おひるねミカンジュース販売を継続していくための利益の確保の

## ○今後の計画

- ・ フィールドワークと商品開発会議の実施、国際文化交流プログラムの実施と、これらを通じた次世代の主体となる人材の発掘、地域としての受け入れ環境づくりの検討。
- ・ 次世代人材が本腰をいれて活動ができるようになるための支援基盤づくりの検討。

## 【質疑応答】

- ・ 涌井委員：大変興味深く聞いた。余計な話だが、自分は廃県置藩がよいと思っている。藩のほうが森里川海の特徴を投影していて、エコロジカルユニットの単位として適しているのではないか。それは自律的自給圏ではないか。小田原と一言でいうが、どれくらいの規模が自律的経済圏をつくるのに適正なのかということが重要だと思った。また連想したのはイタリアのコムーネ（地域自治体、中世では都市共和国のこと）。30人のものも30万人のものがあるのだが、共通しているのは地域の人々が地域に愛着、誇りを持っている。マクドナルドの進出で起こったスローフード運動もそこが発祥だった。守る伝える教えるという3原則があって、地域の歌や食を子供たちに伝え、教え地元を守るというもの。そういったことを考えないと、自律的経済圏ができないのではないかと思った。そういったことを思い起こさせる素晴らしいプレゼンだった。
- ・ 鳥居審議官：これからの事業展開で人材の発掘というのがあった。本事業ではプラットフォームづくり、資金の調達、人材の育成があるが、人材の育成が一番大変だと思う。いくらプラットフォームがあっても人がいないと回らない。人材を作ろうと意識されているので、ぜひ進めていただきたい。またこれまでの大学の発表と重なっている部分があるので、ぜひ連携して良い方向に向かっていただきたい。
- ・ 辻村会長：ドイツの大学の人から国際的な視点として生かせるものはあるのか。また、盛り込める部分はあるのか。
- ・ 農工大学：ドイツの人と価値観が違うことがわかったことが一番勉強になった。日本側の事務局からみて、一番つまらないのではと思ったワークショップが、ドイツの参加者から一番興味を持たれ、評価が高かった。我々が見落とししていた価値がわかったことが一重要だった。外国人を対象としたプログラムと、国内を対象としたものを設定していきたいと思う。森里川海の収益基盤のプログラムになるかもしれないと考えた。
- ・ 小山田：中山先生と一緒に研究をしている。驚いたのは、蒲鉾屋で一番高いツアーを組み、こちらとしては一番人が集まると思ったのだが、ドイツ人には結果として大不評だった。かまぼこはドイツの人には生臭くて食べられないということだった。次年度はドイツへ輸出するにはどうしたら良いかということ課題にしようかと考えるくらい、食文化が異なっていた。
- ・ 石井理事：ドイツのシュタインバイス大学の研修は毎年来るのか。
- ・ 農工大学：ここ5年くらい本学にきている。この地域は評判もよく来年も来たいということだったので、双方の希望が叶えばまた農工大学で受け入れることになる。
- ・ 鈴木副会長：支援基盤づくりの部分で、「2～3年実践的なトライアルが可能となるような経済的支援とポスト」を提案しているが、具体的にはどのようなものか。
- ・ 農工大学：この提案の意図は、第二の小山田さんのように外から来て活躍する人を作っていくかといけなと思っています。どうしてできないのかを分析したときに、安心して活動できる舞台（ポス

ト)、資金がどうしても必要だということになった。資金は年で百～2百万円くらいの最低限のところ。あとは自分たちで事業を起こして稼いでくださいというスタイルでいいと思う。ポストは、例えば地域活動研究員のような、自治体のバックアップがあってやっているという形がないと、特に閉鎖的な地域もあるので活動がしにくい。

- ・ 小山田：大切なことは、お金（収入）、肩書（身分）だけでなく、その人がやりやすいプラットフォームをつくってあげることが大事。お金とポストだけでは続けられない。自分は小田原生まれ、小田原育ちではないのでいろいろ大変なところもあって、内向きだなと思うこともある。そういうところを乗り越えていける側面からの支援が必要。環境志民ネットワークがそういう組織になってくれるとよい。小田原は地域おこし協力隊がこれない地域だが、あの仕組みは一つのモデルだと思う。弊害があることは十分知っているが、成果もあるので重要だと思う。
- ・ 小田原市：環境部だけではなく、小田原市としてまちづくり推進するためには、そういった人材、支援するような視点は必要と思う。行政ではよくわからないところがあるので、実際に活動している人に話を聞いていきたい。環境志民ネットワークの今後の運営など、どうしていくのが一番良いかということについて皆さんと相談して進めていきたい。
- ・ 八木アドバイザー：地域おこし協力隊は定着率6割程度で、4割は資金が終わるとかえってしまう。一方で、移住・交流するところでは「地方で仕事したい」だけではなく、「魅力的なところで暮らしたい」という考え方もある。仕事だけではなく、自分のライフスタイル、社会の観点で定着していく人が増えるのではないかと考えている。農地作業を担う人材がいないということがあるが、お金の問題だけなのだろうか。つらい、かっこ悪いと思われているということで成り手がいないのかもしれない。小田原は人口も多いところであるし、複業のライフスタイルを提案していければいいと思う。
- ・ 渡邊アドバイザー：これまでの課題で出ていた個人の利得と地域の利得を選ぶ仕組みを、どう考えたらいいいのかと思って聞いていた。人材の発掘・育成するという難しさも非常にあると思った。
- ・ 農工大学：個人の利得と全体の利得については、活動に参画する動機についてみてきた。農作業のプログラムについては、イベントとして楽しいので最初は参加者が多かったが、二年目からは少なくなった。これは少なくなったのは個人の楽しいという利得が全体の利得（耕作放棄地守りたい）に勝らなかったから、そこまでの関係性が作れなかったからだと思う。これは大きなテーマだと思っていて、地域が盛り上がる内容から個人と地域の共通項をだせる仕組みを考えて進めている。
- ・ 小山田：八木さんのコメントに答えると、自分は農地でソーラーシェアリングをしているのは、いろいろな働き方を組み合わせて所得を増やそうということで実施している。そもそも、農業がまず生業として成立しているのかという問題がある。しかし農的空間というのは日本の風土と文化に根付いている。農がダメになるということは、地域の風土や文化がだめになるということ。その中で農「業」をどう成り立たせていくのかを考えたときに、百坪の農地でお米をつくると3俵で3万6000円、ソーラーだと60万円になる。従だった発電の方が収入では主になる。そういう問題もあるが、色々組み合わせていくことで働き方を提案したい。自分がどうしてここまでやるかということ、30代が踏ん張って、若い人たちに環境やエネルギーで食べていけるということを示したい。そうしたら若い人たちが入ってくるし、日本が変わると思っている。自分たちの背中を見せることも人材育成の一つである。
- ・ 樋口アドバイザー：中山先生は10年以上小田原に関わっていて、地元以上に課題解決に取り組んで

いる。地域の受け入れ側の協力者にも利得を配慮してもらっているのはありがたい。地域の事業者が国外や国内の他地域にもものを売っていくときに、こういった交流を含めたマーケティングと繋げていくと、本業支援になる。おひるねみかんについては、スケールメリットを生かしていきたいということだが、地元の生産者をどうネットワーク化していくかという具体的なアイデアがあれば教えて頂きたい。

- ・ 農工大学：地元のミカンを集めていく中で、意欲の異なる生産者をまとめていくことが大事で、熱意に差があるからといって排除してはいけないと思っている。最後に目指していくもの、耕作放棄地を減らす、文化を守る、地域を守るということを共通にしていければと思っている。
- ・ 樋口アドバイザー：商工会議所ではいろいろ取り組みをしてきたが、なかなか地元産のものが普及しない。この間おひるねみかんジュースをPRさせていただいた。おひるねみかんも飲んだ人には値段も含め理解してもらえるのだが、そういったあたりで、地元の人が飲まないものをブランド化することはできない。地元の人にどれだけ愛してもらえるかということを工夫して行ってほしい。

## 2.総括コメント（涌井委員）

- ・ まず大学の皆さんが小田原をフィールドにして地域にどう貢献していくかということの研究されていることに深い敬意を表したい。
- ・ 小田原市に対する視点が古いといわれるかもしれないが、私の中にある小田原からいうと、森里川海のシステムが溶解しはじめてるように見える。北条早雲が関東一帯を支配するための拠点になり得たのか、最近まで交通の拠点になり得たのか。こういうところが溶解している。
- ・ 小田原は昔、財界人・文化人が思索を深める場所として利用されていた。しかし残念なことにもうそういう場所ではない。もう一点は、以前は温暖な気候と海流をつかって、ここならではの農林水産業が盛んであった。しかし耕作放棄地の問題にあったように、今はそういった状況ではない。つまり小田原は溶けつつある。
- ・ この地域の連関のシステムを再構築し、可視化させることが大きな課題である。これらは個別の課題ではなく、システムである。小田原の山が荒れていたら豊かな海産物は生まれるのかということ。全てが繋がりにあっている。
- ・ 一つ改善する可能性としては、交通状況が改善していくと、これから出てくる大きな課題は小田原がマルチハビテーション、二重居住を受け入れられる滞留拠点のエンジンとなりうるかということだと思う。小田原にそれだけの魅力が回復すれば、たとえば自分が一週間のうち3日は東京、4日は小田原で過ごすというスタイルは十分考えられる。交流は通り過ぎてしまうだけであり、滞留という観点が重要であると思う。
- ・ 皆さんの研究が自立する経済圏に収斂していく。さらに、地域の中で循環する仕組みに、他からの経済を吸引していく働きがあれば、小田原をより経済的に強化できる。
- ・ 溶解しはじめているシステムを再構築するためには、「魅力」を構築するだけでは足りない。これから森里川海の魅力を生み出し、小田原がどれだけの人を引き付ける「磁力」を構築できるかということが重要になってくる。次の段階の研究が充実したものになればと思う。皆様には頑張ってほしい。

【中間報告会兼有識者意見交換会 参加者一覧】

	氏名	肩書
1	涌井 史郎	環境省地域循環共生圏の構築に向けた有識者会議座長 小田原地域担当有識者
2	鳥居 敏男	環境省 大臣官房サイバーセキュリティ・情報化審議官
3	泉 勇氣	環境省 大臣官房環境保健部環境保健企画管理課課長補佐
4	山根 篤大	環境省 自然環境局自然環境計画課 事業係
5	幸福 智	いであ株式会社 国土環境研究所 生物多様性計画部 主査研究員
6	吉村 奈緒子	いであ株式会社 国土環境研究所 生態解析部 主査研究員
7	西田 貴明	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 グリーンインフラ研究センター 副主任研究員
8	八木 輝義	株式会社サーチフィールド FAAVO 事業部 マネージャー
9	渡邊 たかし	生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ 専務理事
10	石井 健治	さがみ信用金庫 地域元気創造部 調査役
11	樋口 裕紀	小田原箱根商工会議所 中小企業相談部 経営支援課
12	辻村 百樹	おだわら環境志民ネットワーク会長（株式会社 T-FORESTRY 代表取締役）
13	近藤 増男	おだわら環境志民ネットワーク副会長（有限会社小田原植木 代表取締役）
14	鈴木 伸幸	おだわら環境志民ネットワーク副会長（FM 小田原株式会社）
15	伊豆川 哲也	おだわら環境志民ネットワーク理事
16	川島 範子	おだわら環境志民ネットワーク理事
17	石井 智子	おだわら環境志民ネットワーク理事
18	古川 剛士	おだわら環境志民ネットワーク理事
19	鳥海 義文	小田原市 環境部長
20	山下 龍太郎	小田原市 環境部環境政策課長
21	石井 敏文	小田原市 環境部環境政策課 副課長
22	石井 園子	小田原市 環境部環境政策課 係長
23	近藤 千夏	小田原市 環境部環境政策課 主任
24	杉田 智史	小田原市 環境部環境政策課 主任

【大学参加者】

1	小倉 琴美	文教大学国際学部国際観光学科 3年
2	小島 陽香	文教大学国際学部国際観光学科 3年
3	宮島 朋花	文教大学国際学部国際観光学科 3年
4	渡辺 美緒	文教大学国際学部国際観光学科 3年
5	伊東 日向	東京都市大学大学院 環境情報学研究科 博士後期課程
6	一ノ瀬 友博	慶應義塾大学環境情報学部教授
7	阿久澤 萌	慶應義塾大学総合政策学部 4年
8	鬼頭 秀一	星槎大学副学長/大学院教育学研究科・共生科学部教授
9	保屋野 初子	星槎大学共生科学部教授
10	中山 政行	東京農工大学大学院生物システム応用科学府 特任助教